

系統化・専門化・細分化・脱生活化のいきすぎという問題点をもつ現在の教育に対置するものとして、歴史性・総合性・人間化・生活化・感性的体験などをもちたらしめるものとしての総合学習が考えられる。あるいは、受験一本ヤリの教育に対するものとして、本来の中学完成教育や高校完成教育の具体化としての総合学習が考えられる。

さらに私達がこの総合学習の研究と実践から気づいた点は、我々教師がなかなか総合的に物事をみれず、専門教科のワクを出れず、従来の黒板を主体とした講義調の授業から脱皮できず、生徒の全体像に迫る事ができないでいるという事である。この最後の意味は、こういうことである。教師は専門教科を通じてしか生徒を見ておらず、数学の教師は数学の出来る生徒が良い生徒だと思ってしまうがちになるという事である。生徒は三年間で全体として何を学んだのかという事に全く無関心であり、ましてや中学や高校の三年間で、どのような生徒に育て上げようとするのか、教科担任は全く無関心であるか、又は積極的にそのワクを越えてそれにかかわろうとしない。教師の関心事が専門化・細分化されている。

私達は総合学習にとり組んだ事により、生き方を教える場としての新しい教育へのワンステップを踏み出した事になるし、新しい学習領域と新しい学習方法への冒険を始めた事になる。そして何よりも自分自身の総合化をしはじめたのだ。

5 今後の課題

まず第一には、私達はもっとグループ内で相互学習をしなくてはならない。担当教科で困っている点を出し合う。そしてそれを解決する一つの方法としての総合学習を共同で作りにあげていく事である。すでに作ら

れた十の授業は私達の共有財産となっている。さらに共有財産を増やしていく事である。

この総合学習では生き方を教えていくのだとすれば、次の課題はやはり平和教育であろう。人類が生きのびる為の教育である。そしてその方法は受験戦争から脱落し、さまざまな理由で学校生活がいやになっている生徒でも興味を持ち魅力を感じるようなものを作っていくなくてはならない。

内容と方法に関する課題のほか、この総合学習の実践を通じて、学校全体の総合化、あるいは学習課程を再検討し、三年間の学習をまとめ完成させるという意味をもつ総合テーマ、あるいは卒業試験としての総合的卒論の実施に向けて努力しなくてはならない。

たとえば、日本が平和な将来をもつ為にどうすればよいかというテーマで、三年間を学ぶ。その中には、教師集団のパネルディスカッションをとり入れたり、学外から講師(有名人や学者に限らず市井人でもよい)を招いて話を聞いたり、映画や見学会を織り込んだりする。修学旅行でヒロシマに行くのは有力な行事となろう。文化祭など文化的行事で、平和と戦争をテーマに展示や演劇や合唱などを行う事も良い。このようにして卒業の時期をむかえたならば、三年間で学びとったものを一つの論文(作文)にして出してもらおう。

このように総合学習を従来の教科学習とは違ったものにするためには、新しい教育哲学の下に、新しい内容で、新しい方法を用いて実践しなければならない。

そしてその実践は、学校の教育組織と学習課程のしくみをも改変していくものとならなくてはいけない。この三つの側面が、総合学習を研究する私達グループの課題である。

2. 「人間について考える」……授業案の実際

(1) 総合学習④「食物の歴史」を終えて

増田温美

1. 授業のねらいと実際

人類の発展を食べ物との観点から知らせ、人間の創造性の豊かさを感じとらせることをねらいとして「人間について考える ― 食物の歴史 ―」の授業を実施した。

生物が生き続けていくとき自然条件に大きく影響される。人類とても同じで、大きくちがってきた自然条

件を克服して今日の発展がある。そこで食べ物という一つの観点から人類の発展を歴史的にとらえて、人間とはを考えさせようと試みた。その中で直立歩行による手の活用、脳の発達により道具をうみだし、「文化」をもつに至ったこと、現代もなお新しい文化が生まれつつあるという豊かな創造性をもつものとしてとらえさせたい。そのためには発展の様子を実際に体験させ

ることはどうだろうか。過去3回の総合学習(「宇宙の成立から人類の誕生まで」「サルからヒトへ」「ロボットと人間」)においてはいずれもVTRを利用した授業であったので、前者らとは異なった方法で授業を展開しようと実験をとり入れた。

授業展開を大きく2分野に分け、前者ではサルからヒトへの食べ物の歴史を人類の発展・文化とともに知らせ、後者では弥生時代の米の食べ方を知り、現代の米飯と比較実験させることにより調理技術の発達・工夫を感じとらせることにした。

しかし、実際には前者の方に時間がかかり、社会科の授業を思わせてしまい興味も薄らいでしまった。その結果、弥生時代の米の食べ方として“いひ”を例にとって、現代の米飯と食べくらべをさせたため、食べるという興味のみで終わってしまった生徒、いひの外観だけ見て食べくらべをしようとしなかった生徒もいた。比較したあと十分に生徒らに話し合わせる時間もなく、授業が終了してしまっただけで、比較した感想をレポートに書いてもらったところ、さまざまな子どもらしい疑問点も述べられていて、弥生時代の食べ方との比較だけに的をしぼった方が本時のねらいがより達成できたのではないかと思われる。

2. 本時に対する生徒の感想

- A子： 樹上生活をしているときは虫を食べ、地上におりてきて動物の肉や草などを食べる。生活場所にあった物を食べていたんだと思う。昔の人の食生活の様子を歴史の授業でも習ったことはあったが、実際に米を食べることは今回が初めてであった。実際に食べてみて、弥生時代から今までにすいぶん改良されているなあと考えた。そして、私たちは、すいぶんせいたくな食生活を送っているようにも感じた。
- B男： 人間をみつめてきた何回かの学習の中で、人間の歴史は宇宙全体からみればほんの少しにしかならないことを知った。今回、短い人間の歴史の中で食べ物がこんなに移りかわってきたことを知った。弥生時代の人々がどんなだったか少しわかった気がする。今の生活は当時と比べるとほんとうにすぐれたものばかりだ。もし、鮮新世に、全てのサルが再び森へもどっていたらどうなったのだろうか。
- C男： いろいろな技術の進歩は人間のさまざまな工夫から生じた。人間が進化していく順序が食べ物の面からもきていることがわかった。昔の米を“いひ”でなく“水がゆ”にすればもっと食べやすかったのではないか。
- D男： 昔、狩りや漁をしなければ生きていけなかつ

た生活と、今の金さえ出せば何でも手にはいる生活とのちがいに興味をもった。

3. 弥生時代の米の食べ方を調べて

今回授業の中でとりあげた弥生時代の米の食べ方としては“いひ”をとりあげた。事後一部の興味をもった生徒らとともに、文献に表われた食べ方を現在の道具を使用して試してみたことなど含めて生徒の感想を以下にまとめる。

	弥 生 時 代	現 在
米	白米…丸味をおびたもの 赤米(古代米)… 縦長のもの (奈良県談山神社) 現在のうるち米より粘性がある	うるち米 もち米
製 精	玄米のまま食す	精白米→強化米 胚芽米
調 理 法	ア こしき・れきで蒸す → いひ イ 水とともに煮る →水がゆ・ひめがゆ ウ 水につけておいてから 炒める → 焼米 エ いひをつぶし丸める → もちいひ オ いひを天日乾燥 → ほしいひ	精白米→水とともに煮る(米飯) もち米→蒸す(おこわ)→つく(もち)

(1) いひについて

弥生時代の土器を展示した資料館で、底に3cmほどの穴のあいたこしきを見学した。水のはいった土器をかまどにかけ、その上にこしきをのせ、底の穴をカシワ・サトイモ・ハス・シイなどの木の葉やかご、ざる布でふさぎ、玄米を入れて蒸して食すという説明を受けた。現在の蒸し器と同じだなと感じこれなら授業の中で生徒と共に実験できる、いつか実験をしたいと思っていた。

現在でも栄養面のことを考えて玄米食をする人々がいる。3時間ぐらい玄米を水にひたしておいて後、圧力釜を用いて炊飯をしている。そこで玄米を半日吸水させた後、蒸し器で強火で約30分蒸し煮をした“いひ”と精白米を体積の2割増の水に1時間吸水させておいた後、強火で沸騰まで、沸騰後中火にし、さらに弱火にして炊きあげた米飯とを食べくらべさせた。“いひ”に対する生徒の感想

- 固い。
- ぱさぱさ(ぼろぼろ)している。
- よくかまないと飲みこめない。
- 初めにがく感じたがよくかんでいと甘い。
- あとに皮が残るかんじである。
- 満腹感が得られる。
- 褐色おびていて見た目がわるい。
- 胃に悪いのではないか。
- 胚芽が入っていて栄養的にすぐれている。
- 弥生人は歯・あごがじょうぶだったんだろう。
- あまりうまいものではないが、当時の人々にとってはおいしかったのだろうか。

生徒らの感想はいひから発して、戦争中はどんなごはんだったのかやってみたくか、もし米の伝来がもっとおくれていたらとても今のような生活はできないのではないかという者もあった。

(2) 水がゆ・焼米・もちいひについて

水がゆ・焼米・もちいひについては興味をもつ一部の生徒と実験したものであるが参考として記す。

水がゆについては米飯と同じ2割増の水にて一日夜吸水させた後同様に加熱した。先の生徒の感想にあったように、いひよりはぱさつきが少なく食べやすいようである。

焼米についてはフライパンで玄米をからいりした。香ばしい臭いとこりこりした歯ざわりに生徒の評判はいちばんよかった。

もちいひについては、いひをなべに入れ、すりこぎでついてみたが、粘りがでず、もちとしてまとめることはむつかしかった。気持ち悪いというのが生徒の感想であった。しかし、古代米は現在のうるち米より粘性があるというところから、もち米でやればさらによい結果がでたかとも思える。

(2) 総合学習⑦「生物の性の役割 — 生命創造 —」を实践してみて

高橋 祐子

1. 資料

授業の指導案は前回(本紀要第27集)提出済みなので省略する。他の教材資料として「こんにちは13才」の中から男性生殖器・女性生殖器のスライド、「生命創造」の16mmフィルムを用いた。さらに事前に、授業対象の生徒を通して母親に、子供たちの出産に関する母親の気持ちについて自由記述をしてもらい、その中から特に深い感銘を受けたものを抜粋し、プリントにして配った。資料として配ったプリントの中から2つほど次に掲げておく。

- 出産で入院する前は、もしかしたら自分の生命を落すかもしれないという思いが必ずあり、家の中をすっかり片付けたりしたものです。でも不思議に恐怖感はなかったように思います。出産が始まってなかなかでてくれず、長い時間分娩室でがんばりました。何度も襲う陣痛にがまんできず、りきむ気分を失いかける時、「子どもががんばっているからがんばれ」という励ましで最後の力をふりしぼったことが思い出されます。
- 誕生する前まではいうまでもなく、この世に生

を受けた途端、「こんなにすばらしい子はどこにもいない、まさに地球はこの子を中心に回っている」と思うほどでした。30分も仮死状態だったので泣くのがとてもうれしく、泣き始めると、「この子は生きている、元気なのだ、泣け泣けもっと泣け」と心の中で思いました。鳥の足のように細く、体もやせ細っていて、おむつをかえるごとに足が折れはしないかとそっと宝物のように扱ったこと、しゃっくりのとめ方がわからなくて不安で不安で仕方なかったことなど、ついでこの前のことのように思われます。

2. 授業の実施 昭和58年2月24日(木)

3. 授業のポイント

本時では、性を、生きること、生き続けていくための根底にあるものとしてとらえ、ここでは、新しい生命を生みだしていくことが性の役割であると考えさせた。そして、生命創造という劇的なドラマを16mmフィルムでみることや母親たちにアンケート調査をして作ったプリントを読むことで、生命の尊さを改めて気づかせ、私たち人間は、その尊い生命を生みだすという生まれながらにして、大変重要な性の役割を担